

「反 - 償却的時代」におけるホロコースト記念碑研究 ジェイムズ・E・ヤングによる記念碑研究の位置づけ

唐川 恵美子

目次

はじめに

1. 「記憶の織物」:歴史的メモリアルな織りなす政治的意味
2. 「対抗記念碑」:訪れる者の役割
3. 「反-償却的時代」におけるアート
 - 3-1. ホロコーストをいかに語るのか
 - 3-2. 記念碑的研究における歴史家の役割

はじめに

第二次世界大戦の終結から 70 年近くを経ようとしている現在、戦争を体験した人々の記憶をどのように後代に伝えるべきか、戦争を直接経験していない世代は先代の戦争責任をいかに引き受けていけばよいのかについて、ますます多くの議論が交わされるようになってきている。これらの議論と関連して、個人から他者へ、あるいは個人から集団へと継承されたできごとの記憶が、それぞれの文化的、社会的、政治的文脈のなかでどのような意味をもつようになるのかということもまた問われるようになった。このような関心の高まりに対して、「記憶」や「想起」という用語によってアプローチする研究が数多く生み出されている。その中の一つの領域として評者が関心を抱くのは、戦争記念碑に関する研究である。

とくに 1980 年代以降、ホロコーストの表象と解釈という問題に関する議論が欧米圏の研究者のあいだで展開されたが、戦争記念碑に関する論争もそのひとつの系譜として位置づけられる。当時において争点となったひとつの問題は、あるできごとが歴史として語り継がれるとき、そのできごとは誰によってどのような文脈に結びつけられるのか、そしてその結果いかなる文化的、政治的効果が生み出されるのかということに関わっている。歴史の表象と解釈をめぐるこのような論争的状况において、本稿で扱うジェイムズ・E・ヤング (James E. Young) は、とくにホロコースト記念碑研究において最も先鋭的な仕事を主導した人物である。

ジェイムズ・E・ヤングは現在、マサチューセ

ッツ大学のユダヤ学の講座において教鞭をとっており、とくにナチスドイツによるユダヤ人のホロコーストに関わる記憶の表象の問題に関して、多数の論考および著書を執筆している。ヤングは、*Writing and Rewriting the Holocaust* (Bloomington, 1988) を出発点として、1990 年代以降の欧米における記憶論争に対してつねに発言を行ってきた。ヤングはこのほか、1994 年 3 月から 6 月にかけてニューヨークで開催されたホロコースト記念碑に関する展示「記憶のアート：歴史のなかのホロコーストメモリアル」(*The Art of Memory: Holocaust Memorials in History*) の企画、ベルリンのユダヤ博物館や「迫害されたユダヤ人のための警告碑」(Denkmal für die ermordeten Juden Europas)¹ほか、多くのメモリアル・プロジェクトの審査チームに招聘され、実践的な活動にも精力を傾けている。

本稿で取り上げるのは、*The Texture of Memory: Holocaust Memorials and Meaning* (New Haven, 1993) および *At Memory's Edge: After-images of the Holocaust in Contemporary Art and Architecture* (New Haven, 2000) である。前者は、ドイツ、オーストリア、ポーランド、イスラエル、アメリカにおけるホロコーストメモリアル²の記憶の表象を批判的に考察した大著であり、メモリアル研究の先駆として位置づけられる。後者は、1990 年代の記憶論争を経て、*The Texture of Memory* の論点をさらに発展させ明確化したものであり、ホロコー

¹ ドイツ、ベルリンにおいて 2003 年に除幕。記念碑についての説明は、以下を参照。岩崎稔「記念碑と対抗記念碑」『クアドランテ』第 10 号 (東京外国語大学海外事情研究所、2008 年 3 月)、47-56 頁。

² ヤングは、*The Texture of Memory* のなかで、通常はほとんど同義語として使われるメモリアル (memorial) とモニュメント (monument) を、いずれも広義には「死者の追悼、あるいは英雄と勝利の記念を担う施設や制度」に含まれると定義している。しかし厳密には、メモリアルがあらゆる追悼と想起の営み (場所、記念日、記念式典など) を指すのに比べて、モニュメントは物質的な形態をとる (オブジェ、彫刻、展示物など)。本稿でもこの定義に則り、より広義の記念施設、記念行為を指す場合は「メモリアル」、狭義の記念碑を指す場合は「モニュメント (字数の都合上、以下、記念碑)」と記す。

ストメモリアルその他に、漫画やパブリック・アートの分析にも踏み込んでいる。本稿では、これら二冊の著書を対比させながら、ヤングによる記念碑研究が、1980年代以降の記憶論争とどのように関連づけられるのかについて整理を試みる。

1. 「記憶の織物」：歴史的メモリアルの織りなす政治的意味

1980年代、フランスの歴史学者ピエール・ノラ (Pierre Nora) らが「記憶の場」プロジェクトによって新たな歴史叙述を試み、同時にモーリス・アルヴァックス (Maurice Halbwachs) による集合的記憶論³が再評価されたことで、集合的記憶に関する注目はいっそう高まった。これらの研究は、ある社会的共同体において、その共同体に共通する記憶が何らかの制度によって保持され、共同体の構成員におけるシンボリックな紐帯もまた維持されるという側面に焦点を当てた。

このような動向をふまえ、ヤングは、ホロコーストに関わる記憶がどのような制度のもとに編成され、それによってどのような集合的記憶が生み出されるかという問題に関心を抱いてきた。*The Texture of Memory* は、博物館、記念碑、記念行為などの想起に関わる制度に着目し、いつ、誰が、どこで、何のために想起しようとしているかということについて分析を試みている。

ノラがフランスの「国民的物語」を構成する制度を分析することで、フランスの国民史叙述の構築性を明らかにしようとしたように、ヤングもまたそれぞれの国民史叙述におけるホロコースト叙述の構築性に注目している。「記憶の織物 (texture of memory)」という概念は、まさしくこうした記憶の構成的な側面を捉えるためのものである。つまり、「記憶の織物」という概念によって問われるのは、さまざまなメモリアルがある物語の文脈に沿って関連づけられることで、いかなる政治的、文化的空間が立ち上がるのかということである。また同時に、その空間を共有する人々においてどのような集合的意味や感覚が呼び起こされるのかということも問われる。ヤングはこの概念によって、各国の国民史叙述においてホロコーストの記憶がどのように位置づけられ、訪れる者にどのよ

うな理解枠組を示唆しているのかに着目しながらメモリアル分析を行った。

以下では、個々のメモリアル分析から導かれる主要な枠組について要約を試みておく。第一部「ドイツ：記憶の曖昧さ」で取り上げられるのは、戦後東西ドイツにおけるホロコーストに関する語り、ドイツの加害者性を免罪しようとする立場と、ドイツの加害者性を糾弾する立場との葛藤によって構成されてきたことである。とりわけ、対ナチス抵抗運動者が「ナチズムの犠牲者」として英雄化され、共有された物語が犠牲者としての抵抗運動者の視点から語られる場合、ドイツの加害者性はより曖昧にされてきた。他方、ベルリンの壁崩壊以降には、「ナチズムの犠牲者」と東ドイツ時代における「共産主義の犠牲者」を同列化して追悼しようとする解釈が現れた⁴。このような解釈が「新たな統一ドイツ」のナショナリズムを強化するように機能している事態には、ドイツが過去の責任から逃れ、新たな未来を築きたいとする願望が示唆されているという。

第二部「ポーランド：記憶の廃墟」では、ユダヤ人コミュニティの徹底的な破壊を経験したポーランドの戦後において、ユダヤ人迫害の記憶は不在と廃墟によって認識されるということが示されている。一方で、対ナチス抵抗運動家たちの殉死とワルシャワゲットー蜂起におけるユダヤ人の死が英雄的物語のもとに重ね合わされ、戦後のポーランド建国の理念を支えてきたことが指摘されている。

第三部「イスラエル：ホロコースト、ヒロイズム、国家的贖罪」で扱われるのは、キブツ建設を行ったイスラエル建国初期の開拓者、シオニスト、宗教的ユダヤ人、ホロコースト生存者、世俗的ユダヤ人たちのそれぞれの国家的理想やホロコース

⁴ このような例として、1993年、当時の首相ヘルムート・コール (Helmut Kohl) による新衛兵所 (Neue Wache) の改装は記憶に新しい。この計画によって新衛兵所は、二つの世界大戦における国防軍兵士、都市爆撃によって亡くなった市民、ホロコーストによって殺害されたユダヤ人、共産主義体制下における粛清によって命を落とした市民など、犠牲となる背景が異なるグループを「戦争と暴力支配の犠牲者」として同列に追悼する記念施設となった。ホロコーストにおけるナチスドイツの加害者性を曖昧にするとの激しい論議を醸し出したが、計画はそのまま実行された。

³ Maurice Halbwachs, *La Mémoire Collective*, Paris, 1950.

ト解釈が混在する、イスラエルでの記憶の競合状況である。ここでは、さまざまな立場のイスラエル人が、現代における政治状況を背景にして建設されるホロコースト記念碑や博物館に対して、いかに葛藤に満ちた反応をしてきたかが扱われている。

第四部「アメリカ：記憶とアイデンティティ政治」では、破壊の現場から遠く離れたアメリカという土地において、想起に関わる者のアイデンティティがホロコーストの想起にとって最も重要な要素であることが示される。アメリカの事例において特異なのは、ユダヤ人に対する迫害が先住民や黒人、アジア系移民に対して行われた人種差別の歴史のなかに位置づけられることである。しかしながら同時に注目されるのは、多様なアイデンティティと移民的背景を持つ人々を、自由と寛容の名のもとに救済し、統合しようとする政治的意志によって、アメリカにおけるナショナルな記憶が編成されている点である。

本書の第一の目的は、ホロコーストに関わるメモリアルの意味が、そのメモリアルの置かれた場所や時代、そこを訪れる人々のアイデンティティによって変化することを示すことである。これによってヤングは、ホロコーストというひとつの歴史のできごとをめぐって、とくに国民史叙述との連関においてさまざまな意味づけがなされてきたということを裏付けようとした。実際に本書は、ホロコーストの記憶をめぐって各国で共有されている解釈枠組を分析し、それぞれの国民が共有する記憶の内容によって、ホロコーストに関して異なる理解枠組と帰結が生み出されることを明らかにしている。個々のメモリアルは、それ自体としてホロコーストの歴史の意味を示唆するだけでなく、それぞれの国民史のより大きな意味の体系へと結びつけられることによって、ホロコーストに関する集合的な解釈を作り出すのである。

2. 「対抗記念碑」：訪れる者の役割

*The Texture of Memory*におけるヤングの中心的な関心は、ホロコーストメモリアルがさまざまな政治的文脈に組み込まれることで、ホロコーストに関してどのような解釈枠組が示唆されるのかということであった。それに対して、*At Memory's*

Edge においてヤングは、ホロコーストに関する語りを受容する側の役割に注目するようになった⁵。つまり問題は、受け手である個人が、共有された解釈枠組によって提示されたり語られたりする記憶をいかに理解するのかということに関わっている。とりわけ、ホロコーストを直接体験したのではない世代が、ホロコーストをモチーフにした映画や小説、メモリアルなどの語りを通してできごとを知るようになったあと、いかなるイメージによってできごととの衝撃を理解するようになるのかということが中心的な問題となる。

このような問題関心を背景として、ヤングは本書のなかで、記憶をテーマとしてアート活動を行う人々の作品を分析しているが、記念碑研究の観点からは、とくに第四章と第五章が注目に値する。これらの章では、ドイツやオーストリアにおける「対抗記念碑 (counter-monument)」の試みが挙げられ、ホロコーストの想起における新しい局面について考察されている。

「対抗記念碑」とは、1980年代からドイツにおいて建てられるようになった記念碑の総称としてヤングが名付けたものである。記念碑は一般的に、時間の経過による老朽化や侵食の影響を受けず、永続的であると想定されてきた。これによって、記念碑に託されている記憶もまた変化せず永久に保たれると考えられてきた。それに対して「対抗記念碑」は、従来の記念碑のもつ形式に対して対抗的な形式と着想によって建てられる。「対抗記念碑」のコンセプトでは、記念碑の意味は時代や場所の景観、それを取り巻く人間の営みのなかで変化を被らざるをえず、記念碑に託された記憶の内実もまたつねに変化にさらされているという前提がある⁶。従来の伝統的な記念碑が、垂直的で男性的、または擬古典的で権威的な形態によって歴史

⁵ 近年の集合的記憶論の概観とその問題点については、Wulf Kansteiner, "Finding Meaning in Memory: A Methodological Critique of Collective Memory Studies," *History and Theory* 41, no. 2 (May, 2002) に詳しい。カンシュタイナーは本稿で、個人がいかに集合的記憶イメージを受容するかということに関する探究の必要性を強調しているが、この問題に関してはヤングもまた James E. Young, "Toward a Received History of the Holocaust," *History and Theory* 36, no. 4 (Dec, 1997) のなかですでに関心を示している。

⁶ James E. Young, *The Texture of Memory: Holocaust Memorials and Meaning* (New Haven, 1993), 28.

上の英雄の名声を称えたのに対抗して、「対抗記念碑」の試みは、見る者に反省や熟慮を促すために有効な形態を摸索している途上にある。

第四章には、こうした「対抗記念碑」の具体例が示されている。ここではとくに、ホロコーストの破壊がもたらした、徹底的なユダヤ人の「欠落 (void)」、「不在 (absence)」や「空白 (emptiness)」に言及するのを可能にする形式として、三つの「対抗記念碑」が紹介されている。ホルスト＝ホーアイゼル (Horst Hoheisel) の「否定形の記念碑 (Aschrottbrunnen)」⁷は、1908年にユダヤ人実業家ジグムント・アシュロット (Sigmund Aschrott) が建て、のちにナチスによって破壊された噴水にちなむ。この噴水を象って1987年に建設された記念碑は、一定期間展示されたのちに、上下を逆さまにして地面に埋め込まれた。記念碑は地上からは目に見えないようになっているが、通行人はかすかに聞こえる水の音によって、記念碑の存在と、そこでかつて起こったできごとの痕跡に気づくのである。

ユダヤ人の不在を表すために、書物をテーマとするアーティストも出現した。ミカ＝ウルマン (Micha Ullman) は、ナチスの焚書によって失われたユダヤ人の精神的文化的歴史を、地下に埋め込んだ空の本棚によって表した⁸。またレイチェル＝ホワイトリード (Rachel Whiteread) は、背表紙を内側に向けて並べられたコンクリートの本で、箱形の「図書館」を形づくった。見る者は「図書館」の内部に入ることを許されず、本の背表紙が内側を向いているために本のタイトルすら読みとることができない。こうすることによって、それぞれの本に記されたユダヤ人の記憶が、絶対的にアクセス不可能であるという断絶が表現されている⁹。

第五章では、ヨッヘン・ゲルツ (Jochen Gerz) の作品群の分析を通して、ホロコーストを直接体

験したのではない者が、ホロコーストの想起において果たし得る役割について述べられる。ゲルツは、美術作品のなかにオーディエンスを取り込むことで、偶発的な美学的効果を生み出す作品づくりを続けてきた。ゲルツが1986年に取り組んだ「消える記念碑」プロジェクト¹⁰もまた、記念碑を訪れる人自らがプロジェクトの一環となるよう企画された。「消える記念碑」は表面を鉛のカバーで覆われており、通行人は備え付けのペンを使ってメッセージを書き残すことができる。そうしてメッセージが壁を覆い尽くすごとに、メッセージの書かれた部分だけ柱を地面に沈み込ませる工事を行っていく。1991年9月には最後の埋め込み作業が行われ、柱やそこに書き込まれたメッセージもまた地上からは完全に見えない形になった。つまり、人々は「書く」という身体的行為によってホロコースト記念碑の存在を記憶し、記念碑をめぐって起こったさまざまな論争の証人としてホロコーストの記憶に参加することになるのである。このようにして「対抗記念碑」は、見る者自身にナチズムの過去を想起する役割を託し、なぜそれが重要であるのかをおのおのに考えさせる。従来の記念碑がホロコーストの記憶と想起のために必要な解釈枠組を提供してきたのに対し、「対抗記念碑」は記念碑を訪れる者に熟考を迫る。その点で、「対抗記念碑」は伝統的な記念碑の形式とは異なるといえるであろう。

ヤングによれば、これらの「対抗記念碑」ほど、ドイツにおける想起のジレンマと伝統的なモニュメントの限界を具体化するものはない。現代ドイツでの想起の仕事 (memory-work) は、ナチズムの過去と決別するために、伝統的で自己誇張的な記念碑の形式に回帰しようとする動きに対して、つねに緊張した対峙を迫られている。ヤングはそのような状況をふまえて、メモリアル建設は想起の仕事の終わりをしるしづけるのではなく、むしろつねに想起のプロセスを活性化し、訪れる者に回

⁷ ドイツ、カッセル市。

⁸ ベルリン、フンボルト大学前広場に置かれている。1933年5月10日のナチスによる焚書を警告的に想起させるために作られた。1995年除幕。

⁹ 記念碑のコンセプトおよび論争の経緯については、以下に詳しい。古田善文「オーストリアにおける迫害の記憶 (1) ——ウィーンのユダヤ人広場プロジェクトをめぐる——」『ドイツ学研究』第53号 (獨協大学、2005年3月)、39-58頁。

¹⁰ ハンブルク近郊のハーブルクにおける「反ファシズム警告碑 (Harburger Mahnmahl gegen Faschismus)」プロジェクトとして設計された。「警告碑 (Mahnmahl)」とは、ドイツ語で「記念碑」を意味する *Denkmal* をもじって、「警告する (mahnen)」という動詞を使った言い回しである。見る者に記憶の危機と想起の必要性を警告するという意味で、従来の記念碑 (*Denkmal*) に対して対抗的に用いられる。

顧、熟慮、学びの空間をつくり出すことが望ましいと主張する。換言すれば記念碑の時代は、いわば「非 - 記念碑 (non-monument)」の時代に突入した¹¹。「非 - 記念碑」の時代においては、ホロコーストの想起を担う単一のメモリアルは存在せず、複数の記念碑が建設され、つねに活発な議論を巻き起こす。そのうえ「非-記念碑」の時代における記念碑は、見る者に記憶の意味を問うように働きかけることで、現在を生きるわれわれと過去との関係がつねに問いに付されるのである。したがって記念碑は、共有されたナショナルな価値や理想の場というよりは、「対抗し競合しあう意味の場所——文化的闘争の場」¹²となったのである。

ヤングが「対抗記念碑」の例によって示唆しようとしたのは、集合的記憶の受け手が積極的に想起のプロセスに関与する可能性である。上記で説明したように、「対抗記念碑」のさまざまな取り組みにおいて、現代におけるホロコーストの歴史的意味は、個人が記念碑を通して受動的に学ぶものではなく、おのおのが自ら考えるべき問題として提出されている。つまり、想起の営みが永続化するためには、ホロコースト（後）を生きる人々がホロコーストに関する記憶を受容する立場としてあるだけでなく、想起の主体として関与することもまた、必須の条件なのである。

3. 「反 - 償却的時代」におけるアート

3-1. ホロコーストをいかに語るのか

本稿の最後の論点として挙げるのは、ヤングの一連の記念碑研究においてひとつの到達点となっている、歴史の語り方と倫理に関わる問いである。ヤングの記念碑研究は、英雄物語と救済、悲劇と犠牲者化という物語が、プロットはさまざまに異なりながらも、国民史叙述を構築するためにとりわけ好んで利用されてきたということを明らかにしている。このことは、以下で見ていくように、ヘイドン・ホワイト (Hayden White) が「歴史の態 (voice)」と呼んだ問題系、すなわち「歴史をいかに語るか」という問題と、ヤングの記念碑研究が呼応していることを示している。

1990年4月、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校で開かれた研究会議「表象の限界を検証する——ナチズムと〈最終解決〉」において焦眉の問題となったテーマのひとつは、ヘイドン・ホワイトの提起した、ホロコーストの表象と解釈の複数性と歴史的真相をめぐる問題であった。ホワイトの中心的な関心は、ホロコーストというできごとをある物語に沿って「プロット化」する仕方にはいかなる様式が存在するのかということについてであり、ホロコーストのような「深刻な主題」の場合に「適切」とされる様式を序列化することが妥当かどうかということをも問うことであった¹³。さらにホワイトは、それぞれの歴史叙述が過去の事実を指し示しているかどうかという判断基準で「正しい」ホロコースト表象を選り分けるよりも、ホロコーストの語りのさまざまな形式が現代の文脈で効果的であること (effectiveness) の検証に重点を置いた¹⁴。

ホワイトの主張は、ある歴史叙述がフィクションや明らかな嘘を含んでいたとしても、真実性を伝達するのに効果的であれば、それを歴史叙述のひとつとして許容してしまいかねないのではないかという批判を呼んだ。その激しい批判の後景に退いてしまったが、ホワイトの議論で重要な点のひとつは、歴史叙述に関与する歴史家の主観性の問題であった。ホワイトは、歴史家が意識的にとるべき態度として、古代ギリシア語において能動態や受動態と区別されて使用される「中動態 (middle-voicedness)」を挙げた。この場合の「中動態」とは、動詞の主体が行為の外部でなく内部に存在するものとして行為することを表す文法用語としての意味を敷衍して、歴史を書く歴史家ができごとと反省的にかかわりながら物語を構成していく行為を指している¹⁵。つまり、歴史家が歴史を書くとき、その歴史家はどのような動機で、どのような文脈で、どのような目的に向かってその歴史を描いているのかをつねに自問することが求められるのである。したがって、歴史家は自身によって書かれた歴史と切り離して存在すること

¹¹ James E. Young, *At Memory's Edge: After-images of the Holocaust in Contemporary Art and Architecture* (New Haven, 2000), 116.

¹² *Ibid.*, 119.

¹³ ヘイドン・ホワイト「歴史のプロット化と真実の問題」『アウシュヴィッツと表象の限界』(未来社、1994年)、58-59頁。

¹⁴ 同上、64頁。

¹⁵ 同上、79頁。

はできず、その歴史叙述が倫理的に許容可能であるかについて、つねに判断を迫られることになる。

このようなホワイトによる「歴史の態」の探究からは、二つの問いを導き出すことができる。一つには、ホロコーストの表象に新たな方法を導入することは可能であるかどうか、可能であるとすればどのような「態」が存在するのかという問いである。もう一つには、歴史家が歴史叙述における自身の役割に意識的であるとすれば、それはどのような「態」となって発現するかという問いである。

一つ目の問いに対して、ヤングは「反 - 償却的 (anti-redemptory) ナラティブ」という歴史の語り方を評価することで応答していると考えられる。ここで「反 - 償却的ナラティブ」とは、美術史の文脈において定義づけられている¹⁶。ヤングによれば、モダンアートにおける「償却的 (redemptory) 約束」は、近代文化につねに進歩や「新しさ」をもたらし、人々の啓蒙的救済を担ってきた。しかし、この約束は、「ホロコースト後に詩を書くことは野蛮か」というアドルノの警句を想起するまでもなく、〈ホロコースト後〉の芸術においてはもはや無効のものとして認識された。なぜなら、ホロコーストから美や快楽を取り出すこと、破壊と救済を美的に、宗教的に、政治的に関連づけることは、加害者がその犯罪を正当化したのと同じ手法であるためである¹⁷。そのかわりにヤングは、ホロコーストのような徹底的な破壊を美的、神秘的たらしめるすべての救済的レトリックを拒否し、加害の記憶をつねに喚起しつづけるアートを、〈ホロコースト後〉の芸術に不可欠のものとして位置づけるのである。このように、「ホロコーストをいかに語るか」というホワイトの問いに対し、ヤングは「反 - 償却的ナラティブ」を提案したのであった。したがってその具体的な例の一部である「対抗記念碑」もまた、建築的、美学的領域において「反 - 償却的ナラティブ」を体現する形態として理解することができるであろう。

では、ホワイトのもう一方の問いである「歴史家の態」に関しては、ヤングはどのように応答しているのだろうか。つまり「対抗記念碑」を解釈

する歴史家としてのヤングの役割は、どのようなものであるのだろうか。さらに言えば、「対抗記念碑」が「反 - 償却的」であるためには、ヤングは歴史家としてどのような役割を果たしたのだろうか。以下では、ヤングの記念碑研究に対してなされた批判を取り上げながら、これらの問いを検証していく。

3-2. 記念碑研究における歴史家の役割

ホロコーストメモリアルの実践において「反 - 償却的ナラティブ」を探究する試みは、つねに論争的な経過を辿ってきた。1994年3月から11月にかけて、ヤングの記念碑研究をもとにした展示「記憶のアート：歴史のなかのホロコーストメモリアル」が、ニューヨーク、ベルリン、ミュンヘンにおいて開催された。この展示は*The Texture of Memory*において扱われたホロコーストメモリアルを中心に提起し、各国の国民史叙述のなかでホロコーストが異なる仕方で理解されていることを例示した。展示は概してたいへん高く評価されたが、展示の終わりに「“記憶のアート”を訪れる者の役割」として示された結論は、いくらかの反発的コメントを呼んだ。結論部でヤングは、対抗記念碑の取り組みと関連する論争を紹介したあと、「(メモリアルを) 訪れる者が、現代世界におけるさまざまな苦しみを、想起された過去に照らして理解し、それに対して反応しない限り、(想起の行為は) 不完全なものであり続ける」と結び、展示を訪れた者自身が歴史のなかで果たす役割を考えるよう訴えた¹⁸。しかしながらこのような倫理的な要求は、「ポストモダニストの決まり文句」であり「実際の効力」を持ちえるのかどうか、またそのような要求は「記憶のポリティクスに関心を抱く知識人の自己満足なのではないか」という反応を引き起こした¹⁹。つまり、ホロコーストに関する想起の仕事に早々に決着をつけたいとする政治的要請に対して、ヤングの立場はあまりに楽観的にすぎ、そういった要請が生起する社会的な背景を見落としているのではないかというものだった。

また、似たような批判は、ヤングがベルリンの

¹⁶ Young, *At Memory's Edge*, 5-9.

¹⁷ *Ibid.*, 6.

¹⁸ Fred R. Myers, Exhibit Review of *The Art of Memory: Holocaust Memorials in History* by James E. Young, *American Anthropologist*, New Series 97, no. 2 (Jan, 1995): 350.

¹⁹ *Ibid.*, 350-351.

ホロコースト警告碑²⁰建設に審査委員として関わった際にも再び寄せられた。1995年3月、審査委員会は最終審査候補として二つのデザインを決定したが、これらはいずれも完全に審査員の納得のいくものではなかった。とりわけヤングは、ベルリンのホロコースト警告碑の建設が、コール政権によって手厚く支援されることで、ドイツの記憶の問題に対する「最終解決」となってしまうことを憂いていた。そのためヤングは、ホロコーストに対して単一で最後のメモリアルを建てるかわりに、さまざまなメモリアルのコテストや展示を行い、ドイツの歴史認識と戦争責任についての論争を喚起し続けることが重要だと主張した²¹。そのようにしてホロコーストの歴史的意味に関する議論を閉じないようにすることが、ヤングにとって、「反 - 償却的時代」における理想的な記念碑のかたちであったのだ。しかしこの主張は、少なからぬほかの審査員や政治家から「ぜいたくな学者の傍観者的立場」だとして非難されてしまった²²。ホロコーストに対する想起を終わらせてはならないとするヤングの主張は、ホロコーストに対するドイツの政治的責任の履行を決定し、実際に担っていかなければならない立場の者たちにとって、無限の足かせであるように感じられたのだ。

ヤングに対する批判の背景には、統一後のドイツにおける想起の文化のある特徴が示されている。それは、ドイツが分断された国家でなく「統一された普通の国家」としての一步を踏み出すために、ホロコーストの記憶を国民史叙述の定型に沿って再編しようとする傾向が急速に高まったことである。記憶論争を早急に終息させ、ほかの国民国家と同じように、ホロコーストの記憶を国民史叙述のなかに平常化 (normalize) したいとする意見が多く表明された²³。ヤングはこのような動向に、ドイツの想起の仕事が終わりを迎えてしまうのではないかとの懸念を抱き、記憶論争を持続させるための方策を主張したと考えられる。しかしながら、ヤングが描写しているように、ドイツ統一後のナショナリズムの高揚のなかで、それは少数派

の意見であった²⁴。

このように記憶論争を継続しようとするヤングと、記憶論争に終止符を打ちたいドイツ政府側の立場の違いのため、記念碑プロジェクトは停滞した。そのためヤングは、現代ドイツにおける記憶と想起の問題を検証し直すことで、ドイツにとって必要な記念碑と記憶論争のあり方を具体的に示そうと試みた。ヤングは問題として以下の二つの点を挙げた²⁵。第一に、記憶論争が行われていても、過去の罪責を忘却することで勢力を増しているゼノフォビクなネオナチの動きを防ぐことはできていないということ。つまり、記憶論争は現実には起こっている排他的な暴力に対して何ら政治的効力を持っていないのである。第二に、記憶論争がいつまでも終わらないことがドイツ人のなかに多くの恥の感情を引き起こし、論争を早く切り上げたいという焦燥感につながっているということ。このような焦燥感があるからこそ、記憶論争を永続化しようとするヤングの主張が受け入れられないのである。

以上の問題の原因として、ヤングは、ドイツの記憶と想起の問題の核心に、集団的トラウマが刻まれていることを認識するようになった²⁶。そして、人々がその集団的トラウマの原因である「ユダヤ人の失語 (aphasia)」²⁷状態を正面から見すえ、それに適切な語りを探究する決意をすることこそ、ドイツの想起の問題における最初のステップであると結論づけた。ユダヤ人の失語状態とは、ユダヤ人が被った徹底的な破壊の記憶を語る声——もし存在するのであれば、現代のわれわれに対してつねに批判を問いかけるはずの声、まったく喪われている状況である。ヤングは精神分析の用語を使い、ドイツにはユダヤ人の存在とその思想的遺産が絶対的に喪われているために、人々は何が喪われているかを認識できず、一般的な喪 (mourning) の反応ができずにいると分析している。その分析によれば、現代において反動的な懐古主義が勃興しているのは、トラウマによる心理的空隙をひとまず埋めるための過剰反応として理解することができる。したがって、ドイツがその

²⁰ 脚注 1 参照。

²¹ Young, *At Memory's Edge*, 191.

²² *Ibid.*, 191-195.

²³ ホロコーストを平常化する例としては、脚注 4 を参照。

²⁴ Young, *At Memory's Edge*, 192-194.

²⁵ *Ibid.*, 197.

²⁶ *Ibid.*, 196.

²⁷ *Ibid.*, 196.

トラウマ状態から回復するためには、ホロコーストの表象における「反-償却的ナラティブ」を探究し続けることが必要不可欠なのである。

以上のような経緯を経て、ヤングは次の条件を提案した。その条件では、当該の記念碑が「ほかのどのナショナルメモリアルにも取って代わらないこと、ナチスのほかの犠牲者について代弁するものではなく、それらの犠牲者のためにもさらにメモリアルを建てる必要性を訴えるものであること、記念碑論争をさらに押し進めるための、メモリアルの不十分さについての議論、公式な記憶に対する懐疑的見方が反映されていること」²⁸という、記念碑の具体的なコンセプトが設けられた。そうすることで、ホロコーストの表象不可能性、すなわち徹底的に喪われたユダヤの遺産の空白を示唆し続けることの重要性を強調したのである。ヤングは問いを続ける。「想起のための国家的理由とは何か？それらは救済的であるのか、喪のプロセスの一環であるのか、教育的であるのか、自己顕示的であるのか、現代のゼノフォビアに対抗する挑発的発想であるのか？このメモリアルは、どのような国家的、社会的帰結のために建てられるのか？メモリアルはどのくらい反-償却的なものとなりうるのか？それはユダヤ人が喪われたユダヤ人を弔う場所となるのか、それともドイツ人が喪われたユダヤ人を弔う場所となるのか、あるいはユダヤ人がドイツ人のしたことについて想起する場所となるのか？」²⁹。このように無限に問いを喚起し続け、論争を継続させることが、メモリアルにおける「反 - 償却的ナラティブ」を実現するために、ヤングがなしたことであった。

ヤングは、ホロコーストの記憶をつねに活性化しておくために、自ら問いを発しつづけ、公衆に対してはたらきかけてきた。すなわち記念碑論争は、記憶をつねに活性化することに自覚的な「態」を用いることによって引き起こされ、持続していくのである。ヤングのメモリアル研究における出発点は、ヤングが一見静的に収束した記憶の景観を再度検証しなおし、それを再び記憶の抗争状態へと取り戻すことであった。それは、無限に発される問いによって円環的に延長されていくプロセ

スであり、議論が性急に閉じられてしまうことを倫理的に決して許容しない、ヤングの批判的態度によって裏打ちされているのである。

(からかわ えみこ・東京外国語大学大学院博士前期課程)

²⁸ *Ibid.*, 197.

²⁹ *Ibid.*, 197.